

司式:中川信明
奏楽:堀口恵美

前奏:「ああ憐れな罪人われを」(J.L. クレプス)

招詞:娘シオンよ、声をあげて喜べ。わたしは来て、あなたのただ中に住まう、と主は言われる。すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。主はその聖なる住まいから立ち上げられる。(ゼカ2:14,17)

讚美歌:17「聖なる主の美しさ」と

交読詩編 91.1-13

- 01 いと高き神のもとに身を寄せて隠れ/全能の神の陰に宿る人よ
- 02 主に申し上げよ/「わたしの避けどころ、岩/わたしの神、依り頼む方」と。
- 03 神はあなたを救い出してください/仕掛けられた罠から、陥れる言葉から。
- 04 神は羽をもってあなたを覆い/翼の下にかばってください。神のまことは大盾、小盾。
- 05 夜、脅かすものをも/昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。
- 06 暗黒の中を行く疫病も/真昼に襲う病魔も
- 07 あなたの傍らに一千の人/あなたの右に一万の人が倒れるときすら/あなたを襲うことはない。
- 08 あなたの目が、それを眺めるのみ。神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。
- 09 あなたは主を避けどころとし/いと高き神を宿るところとした。
- 10 あなたには災難もふりかかることがなく/天幕には疫病も触れることがない。
- 11 主はあなたのために、御使いに命じて/あなたの道のどこにおいても守らせてください。
- 12 彼らはあなたをその手にのせて運び/足が石に当たらないように守る。
- 13 あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり/獅子の子と大蛇を踏んで行く。

朗読聖書①イザヤ書 51. 12-14

- 12 わたし、わたしこそ神、あなたたちを慰めるもの。なぜ、あなたは恐れるのか/死ぬべき人、草にも等しい人の子を。
- 13 なぜ、あなたは自分の造り主を忘れ/天を上げ、地の基を据えられた主を忘れ/滅びに向かう者のように/苦痛を与える者の怒りを/常に恐れてやまないのか。苦痛を与える者の怒りはどこにあるのか。
- 14 かがみ込んでいる者は速やかに解き放たれ/もはや死ぬことも滅びることもなく/パンの欠けることもない。

朗読聖書②ルカによる福音書 12. 4-7

◆恐るべき者

- 04 「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。
- 05 だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。
- 06 五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。
- 07 それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

祈祷

イエス・キリストと私たちの父なる神さま、聖名を賛美します。どうか御国を来たらせてください。受難節第一主日の朝、あなたは私たち一人ひとり^{あした}をこの礼拝に呼び集め、また、ライブ配信を通して共に礼拝に与えるこの恵みを感謝します。私たちは過ぐる週もイエス・キリストの十字架の御

苦しみに思いを馳せる日々を過ごしましたが、時にあなたから離れ、多くの罪を犯し、他者を傷つけてきたことを懺悔致します。そしてそのような私たちの罪の贖いのために、主イエスは十字架に架かり、三日目に復活なさったことによって、罪と死に勝利されたことに改めて感謝致します。

今日もまた、これから大谷牧師の口を通して、御言葉の説き明かしがなされイエス・キリストの福音の指針を豊かに聞く恵みを与えられます。どうか語る大谷牧師に聖霊を豊かに与えてくださり、また私たちが全身全霊をもって御言葉を受け止めることができますようお導きをお願い致します。

神さま、本日はこの礼拝の後に教会総会第二日目を迎えます。6名の長老が新たに選ばれ、新年度の教会予算についても話し合われます。現在教会は様々な困難な状況を抱えつつも、神さまの呼びかけに応じて宣教伝道の歩みを進み続けなければなりません。力弱く、過ちの多い、迷いの多い私たちですが、あなたの強い御手によって、これからも私たちの教会を正しい道へと導き続けてください。

世界の平和のために祈ります。どうか未だパレスティナやウクライナ、ミャンマーなど、戦火の絶えない地域が一日も早く平穏な状況を取り戻し、神さまが傷ついた人々に寄り添い癒してくださいますように切に祈ります。

また東日本大震災及び東京電力福島第一原発事故から 15 年が経とうとしています。避難生活を余儀なくされている人々、被災地において生活や健康に不安を感じながら生きざるを得ない人々に神さまが寄り添い、慰めと生きる力を与えてくださいますようお願い致します。私たちの教会が続いているささやかな支援の働きも引き続き導いてくださいますようお願い致します。その他、能登半島の大地震やその後の集中豪雨などで被害を受けた方々、また、現在雪害によって日々苦しんでいる方々、また教会の上にあなたが特別なお守りと導きがありますようお願い致します。

私たちは受難節に入り、これから主イエスの十字架と復活に思いを馳せる日々を4月のイースターに向けて続けてまいります。私たちは改めて主イエスの十字架と復活の意味を考え、そのかけがえのなさを心に刻むことができますようお願い致します。また病のため、高齢のため、あるいは仕事や家庭の事情のため礼拝に出席できない教会の肢々にも等しく神さまの御恵みが豊かにありますようお願い申し上げます。

このお祈りをイエスさまのお名前を通してお届け致します。アーメン。

讚美歌:300「十字架のもとに」

説教 「恐るべき者を恐れる」

大谷昌恵

司式者のお祈りにもありましたが、先週の水曜日18日に『灰の水曜日』を迎え、私たちは受難節の時を迎えました。12月のクリスマスから今までは降誕節として、主のご降誕の恵みを味わいながら歩んできましたが、受難節は、主のご受難の痛みと苦しみを覚えつつ、悔い改めの日々を過ごすこととなります。聖書に向き合い、祈りをもって、あるいは人、夫々の方法で主のご受難の痛みと苦しみを我が事として過ごすことができれば、幸いだと思えます。

さて本日の聖書箇所を話を戻しましょう。前回お話しした12章1節から3節までに引き続き、4節以降をお読み頂きました。前回までと同じく、この時もまだイエスは、まず弟子たちを自らに一番近い場所に置き、弟子たちに教えを説きつつ、その後ろにいる大勢の群衆たちにも向かって話を進めています。前回お読みした12:1で、「イエスは、まず弟子たちに話し始められた。」

とある通り、今日の箇所でもその状況は続いていて、イエスはまず弟子たちに教えることを優先しているものと思われます。

12:4、本日の最初の部分で、イエスは弟子たちに、「友人であるあなたがたに言うておく。」と語りかけています。主イエスは神の子であり、救い主でもあります。ご自分の弟子たちにとっては「友人、友である」と仰います。私たちが「友人」、あるいは「友」と言うときに心に思うことは一体どんなことでしょうか。そこには「一定の範囲から自分の中に入ることを許す近しさ」というものが感じられます。例えて言うならば、「心を開いて食事を共にするよう近しさ」とでも言いましょうか、「あなたと私とは同じ立場、同じ高さの地面の上に立っているのですよ」というようなニュアンスが込められていると思います。

ではイエスにとって「友人であるあなたがた」、即ち「弟子たち」とはどのような間柄なのでしょう。もちろんそこには「食事を共にするという近しさ、親しさ」もあるでしょう。しかしそれ以上に、イエスにとっては、「これから先にご自分が進んでいく道をすでに弟子たちと友に分かち合っている」という大きな前提があります。

ルカによる福音書9:22でイエスは弟子たちに「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」と語られています。既に弟子たちには、ご自分の受難と復活とを打ち明け、ご自身が行くべき道の厳しさを弟子たちと分かち合っています。イエスは「このことを誰にも話さないように」命じて弟子たちに語ったということは、「弟子たちだけが知っている」、ということ。それだけ大きな意味を持ったことを打ち明けた弟子たちはイエスにとって既に「友」であり、もはやご自分にとって「最も大切なことを教えるに値する人々」として弟子たちのことを見ているのです。

イエスがここで「体を殺しても」と言っているのは、この後、「弟子たちが直面するであろう迫害」について語っています。イエスの命を奪おうとしている者たちは、ただイエスを憎み、その命を奪うことだけを望んでいるのではなく、その教えをもなきものにしようと企んでいます。ですから弟子たちの命をも奪うことが想定されます。しかしそのような迫害者たちは、単に肉体的に人間を殺し、命を奪うだけのものです。彼らにはそれ以上のことはできません。そのような者たちを「恐れることはない」とイエスは言います。

では誰を恐れるべきなのか。「それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方」、つまり【神】です。イエスによれば、人は他人の体を殺すことはできてもそれ以上のこと、即ち、その人の魂にまで触れることはできません。人の魂は神のみが与え取ることのできるものであり、イエスのためにこの世で魂が危険に曝されるような場合でも、神が一層強く、その魂を守ってくださるのです。その神こそが、体を殺した後「地獄」に投げ入れることのできる方なのです。

「地獄・ゲヘナ(γέεννα) [(アラム語 גֵּהֶנּוֹם)]とは、エルサレムの南西に位置する『ペニンノムの谷(גְּהֵנּוֹם)』に由来するもので、この谷はかつてモレクという神に対する犠牲として子供を焼いて献げる場所でした。後にここは、廃棄物や死体を焼却する場所となり、最も厳しい裁きの場所として理解されるようになりました。「地獄」とは不信仰者が『最後の審判』の後で味わう永遠の苦悩の場であり、永遠に燃える火の刑罰を受ける所です。即ち、死者が死と復活の間で、或る一定期間を過ごす場所ではありません。罪人は「地獄」という永遠に燃える火の中で苦しみ続けなければならないのです。しかし神は、この最後の居場所であり、最高の苦しみを味わ

う場所においても、人を救い出す力を持っています。この地獄において神は、人間の体と魂の両方を滅ぼすことができになります。しかしそれは人間の全てを滅ぼすということではなく、神が罪人の罪を焼き尽くし、清めることを意味しています。或る意味、罪深い人間にとっては自分の存在そのものを焼き尽くし、滅ぼし尽くしてもらった方が楽だとも言えるでしょう。しかし神は、単に人間を殺して消滅することをなさらずに、その罪の身を地獄において消却し、耐え難い苦しみの中で罪人をいわば強制的に清めるのです。人間が持っているのは単に肉体を殺す力だけです。しかし神は肉体を殺し、その魂をも滅ぼすことができになる方ですが、燃えさかる火の地獄の中で、魂については滅ぼすのではなく、地獄の火によって清め、新たな命を与えてくださるのです。人間は肉体を滅ぼされることに恐怖を覚えます。ましてこのイエスの弟子たちのように、自分たちが尊敬してやまない人が、これから受難へと向かって道を進むと聞けば、自分たちもまたその先に肉体の死という滅びが待っていることに恐怖を抱かざるを得ません。しかし本当に恐れるべきは人間に死に追いやる者ではないのです。弟子たちを迫害する者を地獄へと投げ込む権威を持っている方は神ただお一人です。本当に弟子たちが恐れるべきはこの神だけなのです。神は迫害者を地獄に投げ込んでもそこで耐え難い苦しみを与え、罪を清める力をお持ちです。神は決して滅ぼされるだけの方ではない。弟子たちが恐れ、私たちが信じる神は、あくまでも罪人を救ってくださる神なのです。

続けてイエスが語るのは「雀」の話です。1-アサリオンは労働者の1日分の賃金1-デナリオンの1/16に相当する額の少ない銅貨のことです。つまりとても安く売られているということ、しかも1羽ずつではなく、5羽まとめて2-アサリオンという非常に安い金額で売られていました。当時雀は貧しい人の食用でもあり、重い皮膚病の人の清めの儀式にも用いられたそうです。神はそのような安い値段で売られている小さな雀の存在すら忘れないのですから、その雀よりも価値のある人間を忘れるようなことは決してないのです。

昨年、私は膠原病の治療のために、抗免疫薬、抗がん剤の点滴を受けました。それほど強い薬ではありませんでしたので副作用も思っていたよりも少なくて済みましたが、それでも吐き気や食欲不振などのほか、抗がん剤の副作用としてよく知られている髪の毛が抜けるということもありました。1ヶ月に1回の点滴を6ヶ月続けたのですが、点滴してしばらくすると、シャンプーした時にどっさり髪の毛が抜けるのです。点滴の回数を重ねる毎にその抜け方はひどくなり、より多くの髪の毛が抜けるようになりました。初めは本当にびっくりしましたし、非常にショックでしたが、私の場合は期間が決まっていたので全部抜けてしまうことはないだろうと思って諦めました。実際こんなに抜けても髪はまだありましたから、髪の毛は一体どれだけ私の頭に生えているのだらうと思いましたが、抜けた髪の毛の本数を数える気にもありませんでした。おそらく皆さんの中で、ご自分の、あるいはどなたかの髪の毛の本数を数えたことのある方はいらっしゃるでしょう。それをするだけの根気のある方に私はお会いできたらいいと思いますが、さすがに普通の人間にできる業ではありません。しかしそれがおできになる方がいらっしゃるイエスは仰います。それこそが神です。イエスは弟子たちに言います。「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」と。「まさにその方をこそ恐れるべきだ」とイエスは言うのです。

雀もご自分が創造なさった物として神は尊んでくださいます。しかしそ

の雀以上に勝っている弟子たちは、そして私たち人間は、神に尊ばれ大切にされているのです。神がないがしろにされるものはありません。どのような小さな存在でさえ、神はその存在を豊かに祝し、憐れみ、尊んでくださるのです。私たちはそのことを忘れてはいけない、イエスはそう弟子たちに、そしてイエスを囲むようにして話を聞いている大勢の人々に、そして今の時代に生きる私たちにも語りかけてくださっているのです。

イエスの十字架とご復活から2000年経ったこの時代、幸いなことにこの日本では正面切って私たちキリスト者が迫害されるということはありません。たとえ全人口の1%しかクリスチャンが存在していないと言っても、憲法は信教の自由を保証し、私たちキリスト教徒だけでなく、どんな宗教であっても、それが違法なものではない限りは、信じることの自由を守られています。ですから4節にあるように「体を殺しても」と言われても、この聖書の時代のような信仰の戦いが、そのまま命の危機に陥るような場面はありません。

勿論、今も世界中の多くの場所で信仰の自由が脅かされ、夫々の信仰によってその命が危機に陥るような場に遭遇している人がたくさんいることは私も承知しています。しかし今ここでは、この日本という国の話に限らせてください。日本では迫害はないと言っていいでしょう。しかし、日常の生活の歩みを考えれば、そこには自分の存在が脅かされるということが存在しています。自分自身の生活に、自分の愛する者の生活の中に、不意に投げ込まれる不穏なものの存在、病気や事故やあるいは仕事上のトラブル、そのようなものが自分の命をも脅かすのではないかと不安に駆られることもあるでしょう。しかしそのような時、不安に陥るのは自分が生きているという思いの中にあるからです。見方を変えてみましょう。

私たちは神によって生かされているのです。自分が生きていると考えるとき、それは自分の命を自らがコントロールすることもできるものとして考えてしまいます。しかし実際にはそうではないのです。私たちは生きているのではなく神によって生かされているのです。私たちの髪の毛は神によって数えられているのです。自分で数えることはできません。他の誰かによって数えてもらうこともできません。ただ、私たちの命と心とを全て知り尽くしている神によってのみ数えられ生かされています。髪の毛の数すら数えられているのですから、それ以上の私たち人間の全てのことが神には知られているのです。だから私たちは、たとえ罪人として地獄に投げ込まれることがあっても、そのことをなさる権威を持っておられる方によって生かされており、その方によって罪清められ生かされ続けることができるのです。

私たちはしばしば自分の命を奪うものを恐れます。命が尽きれば自分の存在そのものが終わってしまうと考えるからです。しかしそうではありません。たとえ命が尽きても私たちはただ神によって生かされているのです。何一つ神に対して持つて立つことができなくても、神はそんな小さな存在の私たちを愛し罪を赦してください。

本日お読みいただいた旧約聖書、イザヤ書51章12節から14節にはこうあります。「わたし、わたしこそ神、あなたたちを慰めるもの。なぜ、あなたは恐れるのか」。恐れるべきものはただ一人、神のみです。しかしその恐れは恐怖という意味での恐れではありません。大いなる尊敬を持って神のみを恐れ、その神を愛し、神によって与えられた命を大切に生きていきましょう。

祈りましょう。

神さま私たちはあなたによって生かされ命を与えられています。本当の意味で恐れるべき方は私たちの命のみを脅かすものではありません。私たちは何もあなたに差し上げられるものもなく、1羽の雀ほどにも値しない者ですが、そんな私たちの全てをご存知のあなたを心から信じ、恐れ、従っていきたくと願います。どうぞ私たちを忘れることなくお導きください。

この一言の祈り、私たちの救い主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讃美歌:453「何ひとつ持たないで」

献金・感謝(橋本義武)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

父なる神さま、聖名を賛美致します。御言葉を感謝します。イエスさまは私たちに“友よ”と呼びかけてくださいました。そして十字架への道を歩まれることを私たちに示してくださいました。私たちは恐れと悩みの中にあります。そのような私たちに、イエスさまは“真に恐れるべき方がどこにおられるのか”を教えてくださいました。どうか私たちに“神さまのみを恐れ、神さまのみにより頼む者”としてください。

神さま、私たちは小さいものですが、あなたに養われ、生かされて、日々の暮らしを営んでいます。ここに献げましたものを清めて、あなたの御用のためにお持ちください。「主の祈り」を共に祈ります。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上に、いつまでもありますように。アーメン。

報告:特記無し

後奏:「ああ主よ、心より汝を愛しまつる」(J.L.クレプス)



地獄・ゲヘナの語源となった「ヒノムの谷」Valley_of_Hinom

「地獄・ゲヘナ」(γέεννα) [(アラム語) גֵּי הִינוֹם] 本来は地名『גֵּי הִינוֹם בְּנֵי גֵּי (ゲ-ヴェン・ヒノム)』(ヒノム [の子] の谷)